ふるさとを語る

兵庫県は、日本の縮図と言われるほど多様な魅力をもつ県で、多彩な人材を輩出しています。そこで、毎回、さまざまな分野で活躍中の方に「ふるさとひょうご」を語っていただいています。

今回は、気象予報士で、女優業や司会業等、様々な方面でご活躍されている半井小絵さんに、早金県人会事務局長（兵庫県東京事務所長）がお話を伺いました。

半井 小絵さん

なからい　さえ

伊丹市出身。伊丹大使。
気象予報士。
特定非営利活動法人「火山防災推進機構」客員研究員。
2001年に気象予報士の資格を取得し、02年からNHKの気象キャスターを9年間担当する。現在、「真相深入り！虎ノ門ニュース」の月曜コメンテーターや、気象や防災の講演活動などを行っている。
著書：「半井小絵のお天気彩時記」（文春文庫）他。

歌を通して伊丹を知る

事務局長：伊丹大使をされていますが、伊丹での思い出をお聞かせください。また伊丹の良さは何ですか。

半井さん：私は伊丹で生まれ育ちました。小学校高学年の時、伊丹市少年少女合唱団に、幼なじみと一緒に通っていました。私はお祖母ちゃん子だったのですが、祖母は歌が好きで、私も一緒によく歌っていたので、歌が好きになりました。合唱団では伊丹市の歌も歌いましたので、例えば昆陽池などが歌詞に出てきて、歌を通して伊丹のことを知ることができました。学校の校区外の友達も大勢できました。

伊丹を思い出す時、また帰省した際も感じることなのですが、伊丹は空が広いですね。伊丹から六甲山地の端に夕日が沈む風景が本当に綺麗で、東京では見られない伊丹の風景だなと感じます。

また天気が全然違います。冬だと関東では真っ青な空の冬晴れになります。高い山から降り下ろしてくる山の向こう側は雪でも、こちら側は晴れていますが寒く、空っ風が吹きます。一方、兵庫県の場合は山地が低いから、北側からの雪雲も流れてきますし、風の冷たさも違います。六甲おろしと言いますが、関東の風の方が冷たいと感じます。

祖母の影響で気象予報士を目指す

事務局長：気象予報士になろうと思われたきっかけは何だったのでしょうか。

半井さん：私が気象予報士を目指したのは、やはり祖母の影響が大きいですね。祖母が小学生の時に室戸台風が近畿にも上陸しました。当時京都に住んでいた祖母は、木造2階建て校舎の下敷きになりましたが、奇跡的に助かったようです。市内で最も被害が大きかった小学校で、同窓生41名を亡くしています。自然災害の怖さを目の当たりにした祖母は、天気予報を朝昼晩と必ずチェックし、また雷が鳴ると雨戸を閉めてカーテンの上に暗幕をつけ、アクセサリーも全て外して、部屋の真ん中に寝転がるようにしていました。そこで、私も天気予報を一緒に見たり、雷が怖くて横で一緒に寝たりしていました。

OLから気象予報士に転身、活躍の場はNHKに

事務局長：初めて就職されたのは日本銀行とお聞きしていますが、その仕事よりも気象予報士へのチャレンジを選ばれたのですね。

半井さん：日本銀行に在職中、総務、人事、秘書の仕事を主に担当して、窓口を少し経験しました。その間、社会人としての基礎を学びましたが、銀行では周りが金融のプロばかりだったので、私も何か専門性を身に付けたいと思いました。そこで気象予報士の資格を取るため、予備校に通い、通信教育も受講しました。通信教育のスクーリングで、気象予報では権威のある新田先生に教えていただきました。先生に名前を覚えてもらえる程、授業が終わった後も先生にいろいろと質問し、話をしました。

気象予報士の試験に合格すると、スクーリングを実施していた学校から気象会社に来ないかと声が掛りました。ラジオの仕事をしながら、NHKのオーディションを受けたところ、ほどなくNHKの仕事が決まりました。結局、気象予報士の試験受験から約1年、原稿の書き方もわかっていないうちに、NHKの仕事に就くことになりました。

視聴者の応援に力をいただく

事務局長：「NHKニュース7」の気象情

報コーナーに出演され、『7時28分の恋人』と呼ばれていましたね。苦労したこと、楽しかったことなどをお聞かせください。

半井さん：NHKでは、最初は関東甲信越ローカルの午後10時前に流れる気象情報を、2年間担当しました。すると「ニュース7」のオーディションがあるから受けないかと言われ、気象情報コーナーに出演させていただくことになりました。

当時は辛いことの方が多かったです。自分で原稿を作成し、流す映像を考えます。持ち時間は2分と言われていましたが、番組最後のコーナーなので、1分やら3分40秒やらと、急な時間調整が必要で、毎日必死でした。月曜日から金曜日まで祝日も関係なく放送されていましたので、高熱の時も注射を打って出演しました。9年間やっていましたが、休んだことはありません。

でも、週末に気象や防災の講演で全国のいろいろな地域に行くと、「いつも見ているよ。頑張ってね。」と言われ、握手を求められたりしました。NHKの現場ではカメラに向かって話をしており、視聴者に実際に接しているわけではないですから、この様に実際に応援してくださる方にお会いすると、頑張ろうと力をいただきました。

一方、環境、地球温暖化の講演をして欲しいと言われることがあり、自分に知識がないと感じていましたので、NHKに出演している時期に、大学院に2年間通いました。自分の能力を高めたいと、がむしゃらでした。今考えると、ありがたい環境だったなと思います。

女優としても活動

事務局長：最近、女優業としても活躍の場を広げられていますね。昨年10月の舞台公演では、ののの会のメンバーも観劇に訪れたと伺っています。

半井さん：ののの会のSさん、Tさん、Iさんなどに来ていただいて、とても嬉しかったです。県人会のつながりの良さを感じました。

かつてNHKに森光子さんが来られた時に、森さんの方から私に会いたいと言っていただき、「私、この子大好きなの。」と言われ、本当に感激しました。以来、森さんの舞台を見に行き、楽屋にも通していただくなど、ものすごくかわいがっていただきました。その後、表現力を磨きたいと芝居を始めることにしましたが、インタビューで誰に憧れてますかと聞かれ、「40年後に森光子さんみたいになりたいです。」と答えました。

今、劇団に所属しています。昨秋の池袋での公演は昭和ロマンのお芝居でした。一方、内閣府拉致問題対策本部主催の「めぐみへの誓い－奪還－」では田口八重子さん役を演じています。コメンテーターとして出演している番組で拉致の問題に言及していることから劇団の主宰が役をつけてくれました。あまりに大役で気が引き締まる想いです。

防災情報をいかに活用するかが大事

事務局長：NPO法人「火山防災推進機構」にも所属されていますが、どのような活動をされているのでしょか。

半井さん：気象と防災は切り離せないものです。気象予報士をメインに活動している時から日本災害情報学会に入っています。情報をいかに活用して避難につなげるかを研究している学会です。そこでの活動がきっかけで、「火山防災推進機構」に所属しています。

情報を伝えるという立場から、情報をどう活かすかを自分のテーマとしてやっていきたいと考えています。例えば、どのような情報を出せば住民の安全な避難につながるか、などです。

3、4年前に豊岡市の防災プロジェクトに関わっていたことがあります。豊岡に月に2回行くこともありました。会議に出席したり、ワークショップで住民と一緒に市内をまわり、ハザードマップを作ったりしました。豊岡市は防災に関する明確なビジョンを持っていて、活力があると感じました。

様々なことにチャレンジし自己研鑽

事務局長：本当に色々な方面でご活躍されていますが、そんな中で将来目指すところ、夢などがありましたらお聞かせください。

半井さん：気象予報士の資格をいただいているので、私の話を聞いて早めに避難しようと理解を深めていただき、災害に遭わない人が一人でも出てくださったらいいなと思います。NPO法人の活動も同じ思いを持つ仲間とともに続けたいですし、気象と防災の講演活動も続けていきたいです。また最近、司会やコメンテーターとして声を掛けていただきます。女優業もやります。

私を求めていただける場所がある限りは、人前に出て自分のできることをやっていきたいですね。場に出ることで育てられることもあると思いますので、チャンスがあるなら様々な場に出て自分のできることを増やしていきたいです。

多種多様な兵庫県 県人会で更にふるさとを感じる

事務局長：東京でお仕事をされるようになって、改めて感じる兵庫の魅力について教えてください。

半井さん：日本海もあり瀬戸内海もあり、そして山もありますよね。神戸で言えば、山が近くて海もあり、都会でありながら緑豊かで、エキゾチックで、神戸開港150年を迎えるように歴史もあります。また日本海側に行けば、同じ県かと思うくらい風景が違いますよね。兵庫県はある意味まとまりがない、多種多様な地域であるように感じます。

昨年、県人会に入会しましたが、県人会の皆さんは本当に兵庫県やその各地域を愛していますよね。県人会に参加して、改めて兵庫県を意識しました。ふるさとひょうごふれあいセミナーや総会交流会、ののの会に参加させていただきましたが、同郷というだけで心が通い、本当にざっくばらんに話ができました。仕事とはまた異なった素晴らしい方々と知り合える会で、ふるさとを感じることができました。